

## メッセージアウトライン 出エジプト記2:1~25 「モーセ」

[1-2]「さて、レビの家のある人がレビ人の娘を妻に迎えた。彼女は身ごもって男の子を産み、その子がかわいいのを見て、三か月間その子を隠しておいた」

このレビ人の夫婦の名は出6:20節によれば、アムラムとヨケベデ。1:22節でファラオはヘブル人で生まれた男の子はみな、ナイル川に投げ込まなければならないという厳しい命令を出している。しかし、彼女はその子がかわいいのを見て、三か月の間隠していた。彼女はファラオの命令に従わなかったのである。

[3]「しかし、それ以上隠しきれなくなり、その子のためにパピルスのかごを取り、それに瀝青と樹脂を塗って、その子の中に入れ、ナイル川の岸の葦の茂みの中に置いた」

子どもの泣き声も大きくなり、もう隠しきれなくなってきたのであろう。

「パピルス」茎の高さ2メートルほどになる植物。河畔や沼地に群生する。葉は上部にまとまって生じるので茎は竹のようにまっすぐになる。古代エジプトではこの茎の髄の繊維を縦横に編んで紙を作った。パピルスのかごもこのパピルスを編んで作られたものであり、彼女はそれに防水のため瀝青(天然のアスファルト)と樹脂(松脂や天然ゴムのようなもの)を塗って、産まれた男の子の中に入れ、ナイル川の葦の茂みの中に置いた。このようにして自分の産んだ子と別れなければならなかったことに彼女は胸が引き裂かれるような思いであったことだろう。

[4]「その子の姉は、その子がどうなるかと思って、離れたところに立っていた」  
この姉の名は15:20によればミリアム。ミリアムも心配であったのであろう。流れに流されていくのか、川に沈むのか。彼女は遠く離れて立って見ていたのである。何といじらしいことか。

しかし、この時すでに神は働いておられた。

[5] この時一つの出来事が起こった。「すると、ファラオの娘が水浴びをしようとナイルに下りて来た」古代エジプトでは神聖なナイル川で水浴びをすることは、身をきよめるだけでなく、寿命を長くすると信じられていた。エジプトは日本よりはるかに温暖な気候なので、ナイル川で水浴びをするというのも普通のことであっただろう。彼女が歴史上どの人物に当てはまるか多くの学説があるが、保守的な聖書解釈の立場からは後に女王となったハトシェプストではないかというのが有力な説である。

「彼女は葦の茂みの中にそのかごがあるのを見つけ、召使の女を遣わして取って来させた」

かごの中の無力な赤ん坊は何もできない。しかし、そこに神がおられ、神が働い

ておられた。

神はファラオの娘がそのかごを見つけるようにしてくださった。

[6] 神はその子をかawaiiそうに思う心を彼女に与えられた。「これはヘブル人の子どもです」

彼女もファラオが「生まれた男の子はみな、ナイル川に投げ込まなければならない」との命令を下したことをよく知っていたであろう。それで彼女はこのような言ったのである。ヘブル人の子ならばそのまま放っておくか、川の流に流してしまうかできたであろう。しかし、その子は泣いており、彼女はかawaiiそうに思い、自分の子として育てようと決心したのである。

[7-8] 「その子の姉はファラオの娘に言った。『私が行って、あなた様にヘブル人の中から乳母を一人呼んで参りましょうか。あなた様に代わって、その子に乳を飲ませるために。』ファラオの娘が『行って来ておくれ』と言ったので、少女は行き、その子の母を呼んで来た」

その子の姉ミリアムは一部始終を見ていた。それで彼女はファラオの娘に、彼女に代わって乳を飲ませるための乳母を求めさせ、行って、その子の母親を呼んで来た。賢い子である。

[9] 「ファラオの娘は母親に言った。『この子を連れて行き、私に代わって乳を飲ませてください。私が賃金を払いましょう。』それで彼女はその子を引き取って、乳を飲ませた」

この子の母は悲壮な思いでこの子をナイル川の葦の茂みに置いてきた。ヘブル人の男の子を育てることは固く禁止されていたからである。しかし、今は何とエジプトの最高権力者であるファラオの、その娘が賃金を払うから自分に代わって乳を飲ませるように頼んでいるのである。神のなさることは何とすばらしいことであろうか。この子の母は自分の子どもをもはやエジプト人を恐れることなく、堂々と、しかも賃金を払ってもらって育てることになったのである。

後年この男の子モーセがエジプト王家の一員としての扱いを受けながら、ヘブル人としての自覚をしっかりと持つようになったのは、幼い頃このようにして実の母ヨケベデに育てられた影響が大きかったからに違いない。

[10] 「その子が大きくなったとき」このときが何歳かはわからない。乳離れしてある程度物ごとがわかるようになってきた五~六歳の頃か。あるいはもっと大きくなってからであろうか。

実の母はその子をファラオの娘のもとへ連れて行った。「その子は王女の息子になった」そのままいけばエジプトの王になる可能性もあったであろう。

「王女はその子をモーセと名づけた。彼女は『水の中から、私がこの子を引き出したから』と言った」モーセはヘブル語では「モシエ」。これは「水の中から引き出す」という意味のマシャということばを語根とする名前である。後に彼は

イスラエルをエジプトから引き出す人となる。

[11-12]「こうして日がたち、モーセは大人になった。彼は同胞たちのところへ出て行き、その苦役を見た。そして、自分の同胞であるヘブル人の一人を、一人のエジプト人が打っているのを見た。彼はあたりを見回し、だれもいないのを確かめると、そのエジプト人を打ち殺し、砂の中に埋めた」

モーセはエジプトの王女の息子としてエジプトのあらゆる学問を教え込まれ、知識と教養を身につけたことであろう。しかし、彼はエジプト人の姿、形はしていても幼い頃に実の母に育てられたためにしっかりとヘブル人としての自覚を持っていた。彼の体内にはヘブル人の血が流れていた。ある日、彼は自分の同胞であるヘブル人をエジプト人が打っているのを見て、そのエジプト人を打ち殺し、砂の中に隠した。彼は力も強かったようである。

モーセは実の母ヨケベデからヘブル人すなわちイスラエル人がどうしてエジプトに住むようになったか、なぜ苦役をさせられ、苦しめられなければならないのか聞かされていただろう。四十歳になり心身ともに壮健であったモーセは同胞愛に燃えて、打たれていたヘブル人をかばい、ついにエジプト人を打ち殺すということまでしたのであった。彼は神がこのようにして自分をヘブル人を救う者として用いてくださると思っていたのかもしれない。

ヘブル人たちは彼を、自分たちを救ってくれる英雄、指導者として支持し、まつりあげてくれたであろうか。そうではない。まったく理解しなかったのである。→使徒7：22～25参照

エジプトの王子が暇を持て余して、気まぐれに殺人まで犯したくらいにしか思わなかったのであろうか。

[13-14]「次の日、また外に出てみると、見よ、二人のヘブル人が争っていた。モーセは、悪い方に『どうして自分の仲間を打つのか』と言った。彼は言った。『だれがおまえを、指導者やさばき人として私たちの上に任命したのか。おまえは、あのエジプト人を殺したように、私も殺そうというのか。』そこでモーセは恐れて、きっとあのことが知られたのだと思った」

同胞を思うがゆえにモーセが示した勇気も力もヘブル人たちには、そのまま受け入れられていないということがここからわかる。彼らから見ればモーセは単なる殺人者であった。→使徒7：26～28 目的を成し遂げようとしても、性急で短気で力まかせのやり方は、神からも人からも受け入れられないのである。

[15]「ファラオはこのことを聞いて、モーセを殺そうと捜した。しかし、モーセはファラオのもとから逃れ、ミディアンの地に着き、井戸の傍らに座った」

事態は急展開し、この殺人事件のことはファラオの耳にも入った。ファラオは怒り、モーセを殺そうと捜し求めた。彼もモーセがヘブル人の子であるということとはわかっていたであろう。ただ王女の子となっていたがゆえに何もできなかつ

たのであろう。しかし、今は違う。ヘブル人はやはりヘブル人かとの失望や怒りに駆られ、もはや何の憂いもなくモーセを殺すことに全力を注ぐことになったのである。しかし、モーセはファラオのところから逃れ、ミディアンの地にまで逃げて行った。

「ミディアンの地」アラビア半島西部のアカバ湾に面した地域か、またはシナイ半島東部のアカバ湾に面した地域と思われる。エジプトから数百キロメートルも離れた地で、そこへ行くのにはかなりの日数がかかったことであろう。

モーセはその地に着き、井戸の傍らに座った。彼はエジプトからの逃亡の旅で疲れ果てて、ようやくこの井戸を見つけ、そこで渴きをいやし、休んでいたであろう。

[16] 「さて、ミディアンの祭司に七人の娘がいた。彼女たちは父の羊の群れに水を飲ませに来て、水を汲み、水ぶねに満たしていた」

ミディアンの祭司とはどのような宗教の祭司かわからないが、ミディアン人も先祖をたどればアブラハムに至るので、やはり天地万物の主なる神を信じていたのかもしれない。→創世記25:1~2、6 「七人の娘」息子はいなかったようで、彼女たちが父の羊の群れの世話をしていた。

[17] そのとき他の羊飼いたちが来て、彼女たちを追い払ったので、モーセは立ち上がり、彼女たちを救い、その羊の群れに水を飲ませてやった。やはりモーセは弱い者、虐げられているものを助ける思いに満ち、エジプトで武術も教えられていたのであろうか、羊飼いたちを蹴散らして、彼女たちを助けてやったのである。

[18-21] このようないきさつからモーセは彼女たちの父レウエルの所に住むようになり、彼はレウエルの娘のひとりツィポラを妻とした。

[22] 「彼女は男の子を産んだ。モーセはその子をゲルシヨムと名づけた。『私は異国にいる寄留者だ』と言ったからである」

「ゲルシヨム」…ゲル（寄留者）とシャーム（そこに）を合わせたことば。「そこで寄留者である」という意味になる。モーセはレウエルのもとの羊飼いとして生きることになった。

何不自由のない豊かな富に囲まれたきらびやかなエジプトの王子としての生活から、何もない荒野の静寂の中で聞こえてくるのは羊の鳴き声だけという生活への大変化の中でモーセは何を考えて毎日過ごしていたのだろうか。神が自分をイスラエル人解放のために用いてくださるのではなかったのか。しかし、その夢は破れ、今はみじめな逃亡者としてはるか離れたミディアンの地にいる。こうなった以上、もうエジプトのことは忘れて、ここで羊飼いとして一生を終るよりほかはない。これが自分に残された人生だと思って無口になって生きて行ったのだろうか。

山で切り出された木が長い間、貯木場に置かれ、放置されているのは時間の無

駄ではなく、その期間に木の反りやひねり等のくせが出てきて、その上でそれを矯正し、用途に応じて加工し、家具や建材、さらに楽器の材料等にするという。モーセもエジプトの喧騒に囲まれた血気盛んな四十歳の時では神がお用いになることができなかった。人間的に見れば今こそその時だと思える時でも、神の時はしばしばそうではないということがある。神の時はモーセが老境に入った時にやって来たのである。

[23]「それから何年もたって、エジプトの王は死んだ。イスラエルの子らは重い労働にうめき、泣き叫んだ。重い労働による彼らの叫びは神に届いた」

モーセのいのちを狙っていた王は死んだ。しかし、相変わらずエジプトにおけるイスラエル人は労役にうめき、泣き叫び、その叫びは神に届いたのであった。

[24-25]「神は彼らの嘆きを聞き、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた。神はイスラエルの子らをご覧になった。神は彼らをみこころに留められた」

ここでは擬人法で記されている。神は全知全能であられるので、彼らの先祖との契約を忘れることなく、すべてご存じであるが、人間の動作にたとえて、神が彼らの嘆きを聞き、いよいよ彼らの救いのために行動を開始されたことを印象深く示しているのである。そして神は、老境を迎えたこのモーセを用いようとされるのである。

私たちも、さまざまなことを願い、祈りながらも、なかなか物事が変わらない、進んでいかないと思えるようなことがあるかもしれない。しかし、神は時をご存じである。今はその前に私たち自身が神の前に砕かれ、整えられ、養われ、成長しなければならぬ期間かもしれない。私たちが自分の知恵や力ではなく、ただ、全面的に神のみにより頼むことを学んだ時に、神は次のステージを用意して下さるであろう。モーセは荒野で四十年間過ごさなければならなかった。私たちはどのようなところを通されるであろうか。しかし、そのようにして様々な苦しみや悲しみ経験をして訓練されることがあっても、それは私たちがさらに神に近づき、神に用いられるためのステップとなるのである。それゆえ、私たちは失望したり、不信仰になったりせずに、今置かれているところで忍耐をもって神に祈り、神を待ち望んでいくことが大切である。

そして、ちょうどよい時に、神は私たちをご自分の栄光のために用いてくださり、私たちも喜びで満たされる時が来るであろう。私たちは最後まで神のみことばの約束を握りつつ、忍耐と信仰をもって従い続けよう。→ヘブル10:36、ヤコブ1:2~4